

# 人と人、個と個を結びつなげるということ

美酒幸福論 vol.4

そもそも人間にとって幸福とは？ 小さな造り酒屋が人々にもたら  
しうる幸福とは？ しきりに心をよぎる疑問の答えを求め、ご縁のあ  
る方々と幸福談議を重ねています。

今回のお相手は、世界最高速のプラスチック光ファイバーを開発さ  
れ、国際的に高い評価を受ける慶應義塾大学の小池康博教授です。

小池教授が開発したフォトニクスポリマーの活用に関する研究は、  
内閣府の最先端研究開発支援プログラムに選択されるなど、高速通信  
インターネット社会に欠かせないもの。また、従来は不可能とされて  
きた技術的な難題を克服した研究過程やその姿勢も注目を浴び、多様  
なメディアやNHK「プロフェッショナル 仕事の流儀」に登場する  
など、いま最も期待される研究者です。

宮坂醸造株式会社 代表取締役社長

宮坂直孝 みやさか・なおたか

諏訪市出身。慶應義塾大学商学部卒。米国ワ  
シントン州ゴンサガ大学にてMBA取得。  
1983年、宮坂醸造株式会社入社。2007年4  
月、代表取締役社長に就任。趣味は老舗巡り、  
ハードウォッチング、諏訪湖でのカヌー遊び、  
たき火、読書。

慶應義塾大学工学部教授

小池康博 こいけ・やすひろ

1954年東京生まれ。幼少期は宝塚、小学5年  
以降は諏訪で育つ。慶應義塾大学大学院工学  
研究科博士課程修了。慶應義塾大学フォトニ  
クス・リサーチ・インスティテュート (KPRI)  
所長兼務。2006年紫綬褒章ほか受賞歴多数。



## 原点に立ち返ることの重要性

宮坂 本日はお忙しいなかお越しいただき、ありがとうございます。諏訪清陵高校の同窓会でご講演をお聴きして以来、改めてお話を伺いたいと思っていました。今日はそれが叶ってたいへん嬉しく思います。

技術的なことには全く不案内ですが、ノーベル賞を取るかもしれないと噂される天才研究者が話の締め、「テクノロジーは発達したが、それで本当に人が幸せになったのか悩むことがある」とおっしゃったことに感銘を受けました。

小池 あれは全くのアドリブですね。研究者である私がこんなことを言うかと変わりが者だと思われるかもしれませんが、最近、人間が進化した技術に合わせなければいけないのはどうも違うと思うようになって、思わず口を出してしまいました。

宮坂 私どものような門外漢にはわかりませんが、先生が超高速プラスチック光ファイバーという画期的な技術を発明されるまでのご苦労は相当なものがあつたのでしょ



うね。

小池 当時は光ガラスファイバー全盛で、プラスチックファイバーの伝送距離はあらゆる手を尽くしてもわずか6m。「小池のアイデアはおもしろいが机上の空論だ」などと批判されましたね。ずっと結果が出せず、このまま排他されるのではないかと、怖さや孤独感がありました。

宮坂 それでも最後まであきらめず、14年がかりで実現不可能とみられていた新たな技術を開発された。

小池 実は、四面楚歌を突破するきっかけは、一〇〇年も前のアインシュタインの光散乱揺動説理論でした。そこに自分が考えた材料を当てはめてみると、プラスチックでも1km以上伝送可能という結論になる。でも現実には6m。そこで、それまでの製法の間違いに気づき、原点に立ち返って考え、あえて非常識だと言われた手法を用いることで、紆余曲折の末に実現することができました。最先端の論文ではなく、光散乱の本質に迫ったアインシュタインの論文が私のバイブルなんです。その後、メディアに取り上げられ評価していただけるようにもなりましたが、私自身が一番成長したのは、成果が出ずスランプだった頃かもしれません。最先端の研究を進め大きなプレイクスルーをしようとするときほど、根本的なもの、ファンダメンタルズに戻ることの大切さに気づかされました。

## 通底するのは、諏訪人の心意気

宮坂 諏訪は県内一の工業集積地で、精密機器でも食品でも実業界の方々はかなり革新的です。少々常識破りのところがあつて周囲から叩かれてもめげないのは、諏訪の気質ではないかと。先生にしても、一点に集中して錐で採むような方法で成果を生み



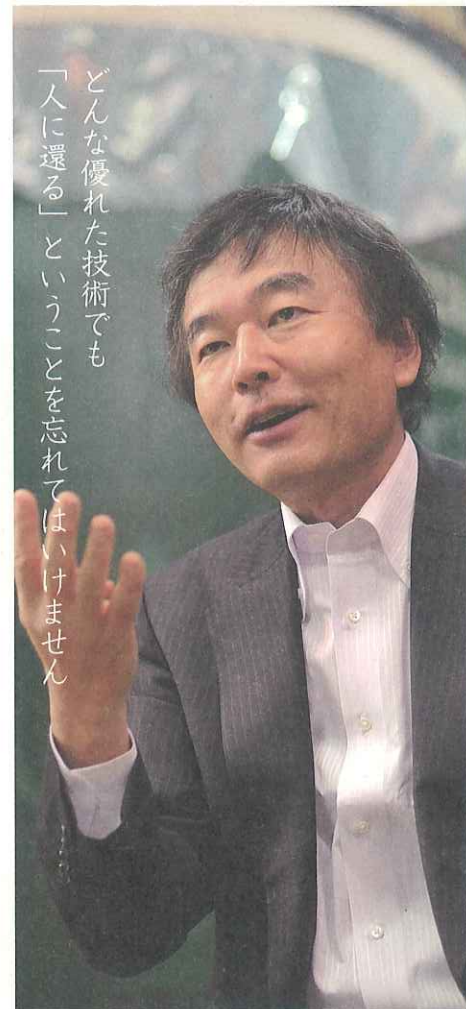
出されていますが、それは諏訪人の一つの特徴だと思えます。

小池 確かにそれはあるかもしれませんが、ね。小池は諏訪に三十数代続く家ですが、実は私が生まれたのはエンジニアの父が東京勤務の時代でした。その後、父の仕事の都合で宝塚に移ったので、記憶があるのは幼少の宝塚からです。ご存じのように宝塚歌劇の地で少し幼稚園の先生がピアノストだった影響などもあつて、私も幼稚園からピアノを習いました。今も弾いていますし、趣味の作曲が気分転換にもなっています。その後、小学5年で諏訪に戻り、高島小、上諏訪中、諏訪清陵高に通ったので、諏訪には8年いたことになりました。

宮坂 宝塚とは気候風土も文化も何もかも違う環境で過ごされた8年間の影響はいかがでしたか。当時の諏訪はマイナス20度以下になるくらい寒く、しかも諏訪は気質も激しいと言われますが。

小池 でも、一度入ってしまうと温かい人ばかりですよ。転校してすぐに「ずら弁」が身について(笑)、友達もできましたし、スケートも楽しみました。私の中にはずつ



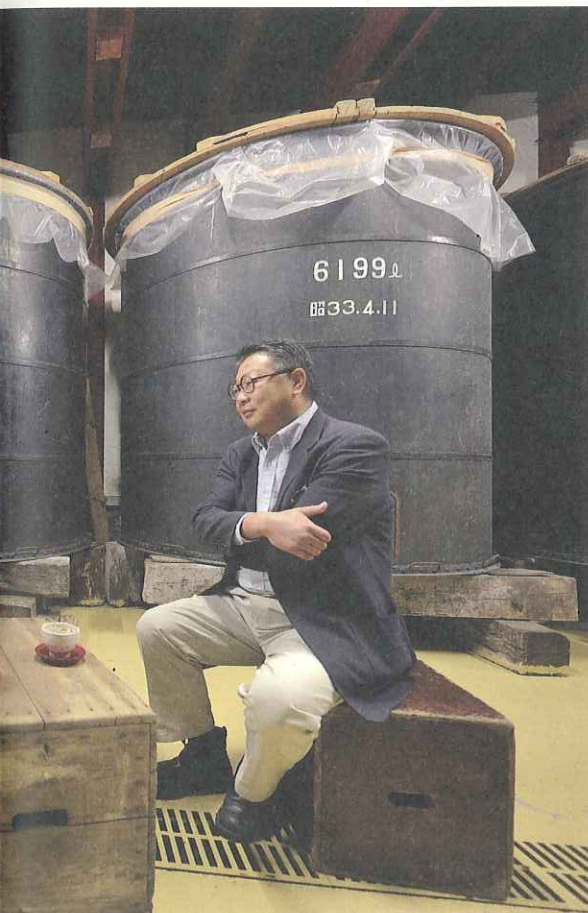


どんな優れた技術でも  
「人に還る」ということを忘れてはいけません

と、清陵のモットーである「自反而縮雖千萬人吾往矣（みずからかえりみてなおくんば、せんまんにんといえどもわれゆかむ）」、自分自身を反省して正しいと確信できたら相手が千万人でも恐れずに立ち向かって行くという教えが影響しています。また、今の私は化学か物理か光かはつきりしない分野ですが、清陵で化学の教師をしていた叔父の影響を受けたのは確かですね。叔父は「赤鬼」と呼ばれていて、たぶん酒焼けだつたんだろうな。それこそ、真澄で栄養を摂っていたような人でしたからね。父も真澄を飲んでいましたし、私も大学生になって実家に戻るたびに飲んでいました。

宮坂 それはありがとうございます（笑）。先生とは比べものになりませんが、私も業界で非常識と言われることをやってきたつもりですが、もつと磨きをかけていかなければダメだと痛感しました。

小池 酒造りとサイエンスは全く別物のようですが、基本に戻ることの大切さは同じじゃないでしょうか。真澄の酒を飲むと幸せな気持ちになれるのは、専門的な技術や蓄積された経験があるからこそ。350年もの歴史を誇る酒蔵にサイエンスなんて失礼になるかもしれませんが、やはりそこには科学的な根拠があり、脈々と伝わる研究と技術の上に深い味わいが成り立っている



のでしょね。  
宮坂 原点といえば、現在の真澄の原点は、祖父たちの時代にあります。実は、曾祖父の頃は非常に経営が苦しかったそうで、曾祖父は立て直しのために必死で働き、結局、過労と仕事上での酒の飲み過ぎで早くに亡くなりました。残されたのはまだ若かった祖父たち兄弟で、父親を酒に殺されたようなものだと感じた祖父たちは、廃業も考えました。当時、既に二百数十年の歴史がありましたから決断は見送られたようですが、続ける以上は人々をハッピーにする酒屋にならうと話し合ったといいます。当

時は男性社会でしたから酒の消費の中心は男性で、外で飲むのが当たり前。そういうなかで曾祖父も体を壊したので、真澄は家庭で飲む酒にしようと決めた。家庭で夫婦が差し向かいで飲むのなら、莫大な借金を抱えることも、飲み過ぎでアル中になるという酒害も発生しないだろうと。そこから再生が始まるわけです。少し甘めで上品な食中酒としての真澄が、家庭を、ひいては地域を幸せにするという考え方を、僕は非常に良いと思っています。祖父や父の「信州の普通の家庭の晩酌の酒」という言葉を聞いて育ったので、どんなに百貨店に勧められても、豪華な桐箱入りで何万円というやり方はどうもぴんと来ない。日常的な中間価格帯であることは、ずっと通していきたいです。

小池 真澄の大吟醸は日本一を受賞するほど素晴らしいけれど、あえてみんなに味わってもらえる値段で温かみのあるもの、というその思想に同感です。酒という文化は、幸せや生き甲斐、家族の団欒のためのものであり、そこに真澄の意義があるという事ですょね。



## 全ては人のために

宮坂 この対談のテーマでもありますが、最近、人間の根源的な幸せとは何なのかを考えています。高級車や豪邸を持つことが幸せかという点、どうもそうじゃないだろうという気がして…。全ての企業のトップは「幸せ研究家」でないといけない。つまり各企業が幸せの有り様を提案できなければ、ビジネスもうまくいかない時代になると思っています。

小池 本当にそうですね。私もね、これまで必死に研究し、論文を書き、教授に昇格し、評価されるようになりました。それは決して悪いことではないし、何のために研究してきたかといえば、世の中が便利になり社会に貢献するためで、間違っていないと思う一方で、いつからかそれを格好良いと思わない自分がいるんです。

私は今、高速プラスチック光ファイバーが世界中に巡りめぐらされることを夢に描いています。国のバックアップを受けているのでプレッシャーは大いにありますが、実現すれば、高精細の大型ディスプレイが個人住宅の壁にかけられ、遠隔の人がまるで目の前にいるようなコミュニケーションが可能になります。たとえば田舎に暮らす

親と100kmの距離があっても、大型ディスプレイを通して会話ができ、一緒に夕食を食べるような臨場感がある。つまり離れた家族が、同時に温かな食卓を囲めるということなんです。どんな優れた技術でも、人に選ばれることを忘れてはいけないと思います。だから自分のテクノロジについて、「Face to Face Communication」と言っています。

宮坂 うちの酒を置いてくださる欧米の、主に寿司屋にいらっしゃる外国人のお客様と話をすることがあります。彼らは確かに寿司が好きですが、目的はそれだけじゃな



く、かといって日本酒、とりわけ真澄だけに魅力を感じているわけでもない。結局、彼らは日本の食卓が有するもの、つまり、食事、酒、器、部屋のしつらえ、日本流サービスなど、全てを包含して漂う日本的なハピネスに惚れ込んでいると感じます。日本酒は一つのパーツなんです。

小池 考えていることが一緒ですよ。テクノロジはツール、縁の下の力持ちに過ぎないと私は思っている。だから「さあ、これが私のファイバーです」なんておこがましいことは全く考えていません。

宮坂 日本はハイテクでもローテクでも素晴らしいものをたくさん持っています。先生はハイテクの世界でますます頑張ってください、我々はローテクの世界を極めていきたいと思っています。ところで、先生の「Face to Face Communication」をめぐって、「Face to Face 飲みニケーション」を私どもで使ってもいいでしょうか？

小池 どうぞどうぞ（笑）。飲みニケーションいいですね、ぜひやりましょう。

宮坂 いつでもお待ちしております。本日はありがとうございました。

企業のトップが「幸せ研究家」にならないと  
ビジネスもうまくいかない時代になると思います

